

## 第四輯 大震災の艱難と残照

### 論文第四 「補論」

ヨーロッパ十八世紀の音楽治療といわゆるモーツァルト効果の根源

モーツァルトの音楽は、他の作曲家には見られぬ効果がある。彼は例外中の例外で、聴き手の心を解放し、癒やす力能を持つ。彼を〈治療師〉と私は名づけよう。バッハなど彼に先立つ人々をはじめ、同時代や以後のと較べても、その効果は遙かに卓越する。奇妙である。モーツァルトの音楽表現と言えども、時代と環境の反映ではないか。然り。だが、広大な領域を占めつつ、作品の各々は鮮明な刻印によつて他のあらゆる音楽家と峻別できる。モーツァルトを聴き、私たちはみずからに戻る。他の作曲家については彼らの音楽に沿つて動き、進む。すなわち私たちがあるいはメンデスゾーンに、あるいはベルリオーズなどに変身するのである。彼らの美しい交声曲には雄々しい調べ、陽光の眩しさ、不意の緊張もあろう。しかし、モーツァルトの楽句にのみ、無垢にして軽快、豊かにして真心ある語りが感じられる。それは私たちを恍惚とさせ、別世界へと導く。そこでこそ本来の状態へ戻つて、奇蹟的にも私たちはたえず進歩するのである。心理的にはモーツァルトが現世でも天国からも人類全体を導き、選ばれた地に住むと確信させる。

Alfred Tomatis, *Pourquoi Mozart ?*, Paris, 1991. (邦訳 アルフレッド・

トマティス著『モーツァルトを科学する』)

太古の時代から音楽は医療のため活用された。原始人に楽の音は神秘的・魔術的力を感じさせ、日々の労働や営みに必須の要素とされた。慢性的な心身症や精神疾患、たとえば心因性の気鬱や頭痛、さらには両極性障害を癒やすには、行進、器楽、歌声を伴う治療的な儀式が行われる。音楽の治療的効果を語る史料では『旧約聖書 サムエル記』が著名であつて、豎琴を弾くダビデがサウル王の悪疾を癒したとされる。古代のギリシャではピタゴラスが音楽に心身調整の機能を認め、プラトンは高潔な人格の形成に有益と述べ、アリストテレスは音楽による鬱積解消を説いた。<sup>①</sup>

中世ヨーロッパでは精神疾患が罪人に対する神の懲罰と説かれ、多くの国で患者は迫害された。ルネサンスに入るや、イタリアの作曲家ジョゼッポ・ツアルリーノ（一五一七年―一五九〇年）が和音や和声に医療的な効力を認め、苦痛の軽減、聴力の回復、狂気への対処、疫病の防止などの治療例を記録した。十七世紀にはこうした効力が演奏に伴う振動に起因するとも説明された。音楽の振動が線維と血液によって筋肉や器官に伝わると言うのである。<sup>②</sup>

古代の歴史書・文学書から同様の事例を多数渉猟した十八世紀スコットランドの自然学者リチャール・ブロックレスバイは、啓蒙の時代にこうした音楽療法が新たな展開を示したと評価し、ヨーロッパ諸国で学術的に報告される治療記録を集約した。彼の著作『音楽の効力―疾患の治療に適用された古代および近代の音楽』は、古代における治療の考証にはじまり、楽の音の生理的考察や治療に役立てる曲目の選定までも含み、音楽療法の古典と評価できよう。しかし、博学多才なブロックレスバイの労作も日本においてはさして知られぬため、同時代の臨床実験に関する論述を主体に、やや長文ながら訳出する。

高度の文明を築いた民族では、古代から音楽を悦楽の方途として開発するだけでなく、神聖な祭事や厳粛な行事の不可欠な手段として珍重した。楽の音に合わせて、神々や英雄を讃えたのである。

都市の建設や増強にあつては、特別の合唱や管弦楽が奏せられ、守護神に祈りを捧げた。音楽に導かれる調和と節度の境地が、国事にも行き渡るよう願つたかも知れない。陸軍と海軍の精鋭は行進曲に会わせて訓練され、法廷では犯罪者に笞刑を執行するに先立ち、しばらく楽器の演奏を聴かせた。かくして政治家や哲学者も音楽を活性化剤として好み、晩年のソクラテスにとって楽器の練習が精神的な楽しみのひとつであつた。〔中略〕

音楽の特効を理解頂くために、歴史的事件に係わるあるひとつの出来事、学識豊かで経験に富むエンジンバラ自然学者の証言について語ろう。一七一五年スコットランドにおけるジャコバイト反乱の際に、ある貴紳が抵抗の大義に共鳴して、国王を僭称するジェームズの野望に資産の大半を賭け、悲運を倍加することになるが、三人の息子も蜂起に関与していた。見せかけの賛同も数々あるなかで、こうした貢献はジェームズから多大の称讃を得る。しかし、反乱軍が対戦したダンブレインでの戦闘で、自身も負傷するとともに、不幸にも息子ふたりが戦死した。こうした危機にあつて懸命にわが身を護り、迅速に脱出した貴紳は、エンジンバラでひっそり余生を送るのを許される。けれども、高い矜持と魂の悲哀が彼を苛んで、心因性発熱を惹き起し、重い鬱病に陥つた彼は必要な食物も摂らず、知人との会話もすべて拒否するに至つた。医薬への万策が尽きたとき、主治医が貴紳の友人に提案して、ひとりの器楽奏者を招き、優美で清澄な音楽、彼にとりわけ喜びを感じさせる旋律を聴かせるよう配慮した。（かねてから貴紳は豎琴の演奏を好んで聴き、その趣味を主治医は承知していた。）身内の人たちもかかる試みに異論はなく、まもなくひとつ、ふたつと楽曲が奏せられるうちに、患者は心身に快い感覚を覚え始め、周囲の容喙を避けて瞑想に耽けるかのようであつた。こうした段階に入るや、主治医は貴紳のもとで毎日一定の時間演奏を続けるよう依頼し、徐々に導かれた患者が通常

① Ewelina Dobrzynska, et al., Music Therapy -history definitions and application. *Archives of Psychiatry and Psychotherapy*, volume 8, issue 1, 2006. p.47.

② *Ibid.*, p.48.

の会話をなしうるまでに至る。まもなく病状に適した食物と薬剤の摂取も可能となり、ついには以前の健康を完全に回復したと言う。〔中略〕

不断の高熱を伴う精神の錯乱に冒されると、必然的な兆候として狂乱の病状が現れる。さきの事例で立証された音楽療法がこうした病状にも有益である。パリ王立アカデミー年報のある報告（一七〇八年、二七頁）がこれを裏付けであろう。極度に疲労したひとりの舞踊師匠が、発熱して五日間昏睡に陥り、やがて無言の錯乱状態となった。必死に病床から離れようと藻掻き、抑制するだれをも厳しい表情で睨みつけ、あらゆる医薬を頑強に拒けたのである。こうした苦境に直面してマンジャゾールは、音楽の効力を試みようとして提議した。彼の発意によつてひとりの知人が招かれ、かねて患者がもつとも好んだ曲目を病室で演奏する。瀕死の患者に向けたかかる異常な方策に、周囲の抵抗もあった。しかし、良き効果が現れ始め、そうした反発は鎮まる。音楽を耳にした患者は、気が楽になったように急身を起し、それまでになく拍子を取り始めて、心地良さそうに首肯を続けた。こうした病状の変化を見届けて、傍らの人たちは彼をひとりにして立ち去る。十五分後深い眠りに入り、仮眠が終わるや、危機は去った。かくして錯乱し激昂する五感が、楽の音に揺られる陶然たる安眠のもとで鎮まったのである。〔中略〕

人類、動物、魚介、鳥類、蛇類をしばしば蠱惑し、それらの本性をも変貌させる音楽の魔力がどこに淵源するか。（碩学ウイリアム・テンプル卿が語られとおり、）かつて音楽が保持し、正当にも古代人に崇敬された効能がいまや完全に失われ、ささやかな楽音として朝禱に歌う修道士の幻想や瞑想のなかに沈殿するのである。（オランダの人文学者）イサク・ヴォンウスはじめ高名な人物も多数同じように申される。博識なヴォンウスの論拠は主としてつぎの三つである。第一には和声の根幹である律動の法則ないし速度の変化を、最近の作曲家は僅かしか考慮しない。いまだきの楽器が充分工夫されたものでないことが、その第二である。なおまた、今様の音楽家は同一の旋律で震音の反復を偏重し、作品に過度の混乱を導入する。彼の意見にまったく賛同しつつ、我らは応えよう。当代でもきわめて優れた作曲は各節における律動の法則に沿い、その結果聴く人はだれしも無上の喜びに浴する、と。そして、あらゆる作品のなかでそうした効能を感じさせるのは、ミルトンの詩作を脚本として名匠ヘンデルが作曲した田園的頌歌『快活の人、沈思の人、中庸の人』を聴くときにほかならぬ、と。この曲目をはじめヘンデルの音楽はすべて律動を厳守し、どの作曲家よりも遍く爽快へ導くのである。①

こうしたブロックレスバイの業績を高く評価するアメリカの研究者マルガレット・アン・ポルクは、十八世紀を音楽療法の確立期と肯定しつつ、この史実を認識した最初の音楽史家としてチャールズ・ブルネイを挙げる。ヨーロッパ音楽史に係わる彼の先駆的研究、『古代から近代に至る音楽の歴史』には名歌手ファリネリによるスペイン国王への治療が記述され、臨床実験の計画的な遂行をできるといふ。②この著名な出来事を筆者は本稿における王妃イザベル・ファルネーゼの項目でやや詳しく叙述したが、あらためてここでは簡潔なブルネイの画期的記述を紹介する。

しばしば噂され、広く信じられたことであるが、スペイン国王フィリップ五世が深刻な躁鬱病に冒され、理容も拒否し、枢密会議への臨席と国事の裁可も困難となったため、重病から回復させるあらゆる方策に頓挫した王妃（イザベル・ファルネーゼ）は、かねて楽の音をとりわけ愛する国王に音楽治療の臨床的実験を試みようとして決意した。ファリネリの世にも稀な奏楽の様子がヨーロッパの各地、なかでもパリからマドリッドへ報告され、王妃の企画によつて彼を招請し、国王ご寝所の隣室でコンサートを開き、フィリップ五世のもっとも好きな一曲を歌わせたのである。

① Richard Brocklesby, *Reflection on antient and modern mesick, with the application to cure of diseases*. 1749, London. pp.2-3, 35-36, 61-62,76-76.

② Margaret Ann Rorke, *Music Therapy in the Age of Enlightenment*. in *Journal of Music Therapy*, XXXVIIii (1). 2001, p66.

国王はまずなにかに気づいたようで、ついで身動きする。第二節を終えるや、ファリネリはご寝所のなかへ入り、鄭重に敬意と愛撫を捧げた。かかる天才にはどれほど高価な褒賞を授けてもよい、と国王は感謝する。事情を熟知するこの名歌手は、まず理容と衣服を臣下に調えさせ、枢密会議に常時臨席されよ、とのみ懇請した。この時点からさしもの重病も医術を受け入れ、名歌手が治療士の誉れを得る。以後彼は連夜国王の傍らで歌唱を営み、王権での愛顧は最高の閣僚とみなされるにまで至った。しかし、加えて一層稀有であるのは、栄達での眩惑や陶醉に溺れることなく、一介の音楽家であるのをつねに忘れず、宮廷においてスペインの貴族貴顕へ変わらぬ謙虚さと礼儀正しさを保持したことであつて、世人も彼の愛顧を嫉妬せず、尊敬と信頼の念をもつて讃えた。①

現代社会の複雑化と病気・病状の多様化を反映して、理学療法やアロマトラピイなど補完医療への関心が拡がるなかで、一九九一年フランスの医学者アルフレッド・トマティスによつて『なぜモーツアルトなのか？』（日本語訳『モーツアルトを科学する』）が上梓された。耳鼻咽喉科の医家であつた彼は、四十年にわたる聴覚教育でモーツアルトの音楽を活用し、これを適用するトマティス・センターが、日本を含む世界各地に設けられた。聴覚の訓練や回復に卓効を示し、創造性や言語能力を高めるモーツアルトの作品について、トマティスはその特色を語る。

この世で生き、感動させるのに、モーツアルトは特殊な資質を与えられた。彼は他者を人間性に目覚めさせ、美と超越と生きる喜びだけの世界に導くのである。もとより他の偉大な音楽家の価値を否定はできない。私はバッハに感心し、ヘンデルを評価するとともに、ハイドンの録音を集め、ときにはベートーヴェンに感激する。モンテヴェルディの音楽も捨て難い。これらすべてがモーツアルトの前後に活躍した音楽家である。かれらはみな音楽という壮大なフレスコ壁画の形成に貢献した。そこにモーツアルトが現れる。

モーツアルトの音楽は、他の作曲家には見られぬ効果がある。彼は例外中の例外で、聴き手の心を解放し、癒やす力能を持つ。彼を〈治療師〉と私は名づけよう。バッハなど彼に先立つ人々をはじめ、同時代や以後のと較べても、その効果は遙かに卓越する。奇妙である。モーツアルトの音楽表現と言えども、時代と環境の反映ではないか。然り。だが、広大な領域を占めつつ、作品の各々は鮮明な刻印によつて他のあらゆる音楽家と峻別できる。モーツアルトを聴き、私たちはみずからに戻る。他の作曲家については彼らの音楽に沿つて動き、進む。すなわち私たちがいるはメンデスゾーンに、あるいはベルリオーズなどに変身するのである。彼らの美しい交声曲には雄々しい調べ、陽光の眩しさ、不意の緊張もあろう。しかし、モーツアルトの楽句にのみ、無垢にして軽快、豊かにして真心ある語りが感じられる。それは私たちが恍惚とさせ、別世界へと導く。そこでこそ本来の状態へ戻つて、奇蹟的にも私たちはたえず進歩するのである。心理的にはモーツアルトが現世でも天国からも人類全体を導き、選ばれた地に住むすると確信させる。〔中略〕

超高周波音という知覚し難い音域に没入してモーツアルトは、無音かに思われる大気を音の渦動が震わせるのを捕捉し、私たちの耳にそれを翻訳した。神秘的な風波を彼の耳だけが知覚でき、それらの限りなき壁画を彼だけが検出する。しかし、モーツアルトの音楽らしき旋律が始まると、私はその調べを聴き取れる。聞き手は彼の宇宙とまさしく連携する。流れるのはまさしくモーツアルトの作品である。だれもこれを間違ひはしない。②

神に選ばれたこの天才は、誕生の前後に神経単位系統へ靈感を授かり、超高周波音を捕捉できた、とトマティスは語る。モーツアルトをバッハなど他の作曲家と対比しつつこの医学者は、独自の装置によるスペクトル分析により旋

① Charles Burney, *A History of Music, from the Earliest Ages to the Present Period*, London, 1789. pp.415-416.

② Alfred Tomatis, *Pourquoi Mozart ?*, Paris, 1991. pp.16-17, 28.

〔参照〕アルフレッド・トマティス著、窪川栄水訳『モーツアルトを科学する』二六・二七、四〇頁。

律の生理的・神経的效果をも解明した。この分析によれば、モーツアルトの名曲には三五〇ヘルツ以上の高周波音がとりわけ豊富に含まれ、これによつて延髄から大脳にかけての高次神経系が刺激される。それゆえ楽節の速い推移が円滑な音の流れを生み出し、音の連携に顕著な運動性があるため、彼の作品は優れて生命力にあふれ、ときには陽気で磊落なのである。なお、トマティスがこうした分析の対象とした曲目は、モーツアルトの『オーボエ協奏曲』、『ピアノソナタ第一番』、『踊れ喜べ、汝幸せなる魂よ』であった。①

若くしてパリで音楽の理論と演奏を学び、トマティスの指導を受けたドン・キャンベルはインド、チベット、日本などで伝統的な民間療法を研究したのち、一九九七年に『モーツアルト効果』（邦訳題名『モーツアルトで癒やす』を刊行した。この著作によつて音楽療法における〈モーツアルト効果〉なる述語が普及するとともに、その翌年アメリカでは音楽療法士教会という大組織が結成され、全米で五千名以上の音楽療法士が活躍するに至る。こうした医療で活用される曲目はモーツアルトの作曲に無制限定されるわけではなく、キャンベル自身もいくつかのジャンルについて各々の効果をつぎのよう特色づける。①グレゴリオ聖歌一寛ぎへ導き、ストレスを和らげる。②バロック音楽一安定感や安心感を与える ③古典派音楽一集中力や記憶力を高める ④浪漫派音楽一共感や同情を強める ⑤ジャズ一気分を解放させ、悲しみから解放する ⑥ポピュラー音楽一軽やかな動きを誘い、心身を健やかにする。②十五年間二五万人以上の受講者に教えたと言うキャンベルが、著者の結びとして四十余种の疾患に及ぶ具体的な治療例を挙げる。そのうち二例を以下訳出する。

#### 〈激痛〉

拡張性脱臼で膝を手術した一週間後、四二歳のウエンディは、コロラド州アーヴァダの高齢者音楽連盟の療法士ルース・ヒンリックスに救いを求めた。脚部が痙攣で痛み、その強度は一度から十度までの尺度を超え、十二度にも達する、と彼女は訴える。その痛みを具体的な形象や色彩で心に描くよう、ヒンリックスはまず指示する。ついで音楽的な処方として私（キャンベル）の作曲した「ルーン・ダンス」（アルバム『エッセンス』より）とエメット・ミレー博士作曲の「癒やしの旅」を聴かせ、痛みの軽症を身体から追い出すよう求めた。そのあとジェイムズ・ゴールウェイによつてフルート用に編曲されたモーツアルト作曲「クラリネット協奏曲 K六二二」のアダージョに曲を替え、感覚に意識を集中できるよう患者を導く。温暖な浜辺にいて、寄せては返す波が、身体から痛みを洗い流すように感じた、とウエンディは後日描写する。

診察が終わる頃には、痛みの程度が十二から三に軽減した。手術以降初めて熟睡できたと、四日後の診察で彼女はヒンリックスに報告する。かくして脚部の痙攣は治まり、順調に回復したのである。③

#### 〈神経筋・骨格筋疾患〉

神経筋・骨格筋疾患はアメリカ人二千万名もが苦しむ疾患であつて、激痛に襲われ、歩行困難となる。仕事や学業や旅行はもとより、日常の雑務も患者はできない。近年の医療実験では歩行不可能な人、あるいは正常より歩行速度遅い人二五名に音楽とリズム刺激が与えられた。被験者のうち十六名は五二歳から八七歳までの中高年に属し、介護施設、病院、高齢者住宅などの入居者で、脳卒中や痙攣性障害、関節痛や脊柱側湾症を患うのである。歩くり

① Alfred Tomatis, *op.cit.*. pp.181-192, 152-159.

トマティス著、前掲、一八一・一八九、二二一・二二三頁。

② Don Campbell, *The Mozart Effect*, New York, 1997. pp.77-79, 124-125.

ドン・キャンベル著、日野原重明監修、佐伯雄一訳『モーツアルトで癒す』日本文芸社、一九九九年。二、一一一・一一二、一六五・一六六頁。

③ Campbell, *op.cit.*. pp.223-224, 245-246.

〔参照〕キャンベル著、前掲、二七三・二七四。

ズムに合わせるべくまず選ばれたのは、力強い拍子と明白なテンポの行進曲五つ、〈星条旗よ、永遠なれ!〉、〈歌劇『アイーダ』の『大行進曲』〉、〈ミュージカル『ザ・ミュージック・マン』から七六本のトロンボーン〉、そして〈忠誠〉であった。カセット・レコーダーとヘッドホンを被験者に渡し、歩調を合わせる拍子を能力に応じて指示した。第一拍で踏み出す人、第一拍と第三拍で進む人、四拍すべてで進む人、さらには八拍まで歩み続ける人。最大の成果は脳卒中を病む六六歳の男性患者で、一歩進むのに三十秒を要した彼が、一秒で踏み出したのである。うち十名は正常なりズムを回復し、さらに九名はわずか二秒か三秒で先に進めるようになった。この医療実験には若干の子どもも含まれる。脊椎破裂に冒された七歳の男子は一歩進む毎に十七秒を要したのに、八秒にまで短縮できた。①

医学にも音楽療法にも門外漢である筆者は、トマティスによってなされた聴覚機能への物理学的・生理学的分析にも、キャンベルにより報告される音楽療法の膨大な実験と成果にも感服する。彼らの業績が世界的な反響を呼び、各国で多くの類書が刊行され、専門的な機関も設置された。これらの多くではトマティスの理論を継承し、モーツァルト音楽の重要性が強調され、顕著な医療効果を秘めた彼固有のリズムは、天賦の資質によるとともに、父レオポルドによる稀有な英才教育の所産とも言われる。しかし、ともすれば散見するように、神童ヴォルフガングの数ある逸話を並べることは、〈モーツァルト効果〉生成の根源を把握するには、ほど遠いと思わざるをえない。

こうした解説に代えて本稿では、豊穣なる音楽活動においてヴォルフガング自身とモーツァルト一家が、音楽の医療的効果をどれほど自覚していたかを、せめて辿ることとしよう。この見地で遡れば、博識にして多病である父レオポルドが、少年ヴォルフガングを伴って隠棲中のファリネリを訪ねた事実がまず挙げられる。

カストラート歌手としての天稟や名声にかねて敬服するレオポルドは、十四歳のヴォルフガングを伴ってポローニャ郊外の山荘にファリネリを訪ねた。一七七〇年三月二七日付の妻宛書簡には、この訪問について一行のみ誌され、いかなる会話が交わされたか、ましてやスペインでの音楽治療が話題にされたか否かは不明である。しかし、モーツァルト一家の健康に関しては、天才児にあり勝ちな疾患がかねてヴォルフガングに懸念され、一七六二年六歳のときウィーンで猩紅熱に陥り、葉草マツムシソウ等の合剤で治療された。三年後のオランダ滞在の際も発熱で四週間病床に伏し、キナ皮等の合剤が与えられる。このときは姉ナンテルがまず高熱で倒れ、一時危篤状態にあったが、奇蹟的に回復した。なおまた、一七六七年に始まる第二次ウィーン滞在では、天然痘の猛威によってハプスブルク皇室にも犠牲者が惹起されるさなか、避難先の都市ブルノでまずヴォルフガングに天然痘が発症し、ついで姉ナンテルも感染したのである。両者は地元貴族とその侍医の配慮によって幸いにも回復するが、ヴォルフガングには痘痕が残ったとされる。なお、博識多才なレオポルド自身も喉と指の痛みなど持病を抱え、キニーネのごとき新薬開発や飲茶等の民間薬にも関心を寄せた。こうしたモーツァルト一家がファリネリも奇蹟的な音楽療法に無関心であったとは到底思われぬ。②

青年時代のモーツァルトが多難なマンハイム・パリ旅行において、名歌手ラーフから親密な支援を受け、とくにパリにおいて日々行動を共にしたことは、〈モーツァルト効果〉の根源として一層重要である、一七五五年リスボン公演のち、ファリネリの庇護を受けてマドリッドで暮らし、二年後ともに帰国の途についたラーフは、スペイン王宮における音楽療法の秘話を熟知し、ファリネリから多くを学び受けたであろう。モーツァルトと同じくパリに滞在し、一七八八年のコンセル・スピリチュエルに数度出演した際には、ラーフについてデルモンント公妃を癒やした秘話が、当時広くパリの巷間で噂されていた。当地の定期刊行物『パリ情報』で、彼の横顔をつぎのように紹介されたからである。

① Campbell, *op.cit.*, pp.263-264.

〔参照〕キャンベル著、前掲、三〇九-三一〇。

『パリ情報』第一〇五号（一七七七年四月十五日水曜―十九日月曜）

コンセル・スピリチュエルにおいて勲爵士ラーフの歌唱が一日与えた感銘について、ここで報告を欠くことはできぬ。満場が熱狂し、小曲のアンコールが求められた。高貴、軽妙、流露を兼ね備えた稀有の資質である。

この名歌手は多年にわたり最高の名声に輝いている。『ジュルナル・アンシクロペディク』一七七六年八月一五日号一五五頁および『ジュルナル・ド・ムジーク』一七七七年第三号十六頁にはつぎのような秘話が掲載された。これによつて読者はラーフへの関心を一層高められ、彼の芸風について別の側面を認識されるであろう。「音楽など学芸のパトロンであるナポリのベルモント・ピナテリ公妃は、かねて病床にあつて医師団に囲まれ、ある日名高い勲爵士ラーフを招かれた。彼が病室に入るや、チエンバロの脇に置かれた小アリア集の一曲を歌えよう所望される。奇しくもそれは著名なハッセ、異名ザクセン人の作品であつた。アリアの歌唱がしばらく続く間に、公妃を苦しめる熱病がまったく消えたのである。その治療にラーフの歌唱ほどの良薬を見出せずいた医師団は、彼女の急速な恢復に仰天した。〈公妃様、〉と侍従のひとりは申し上げた。〈これこそあなたの主治医でございます。〉快癒に深く感動された彼女は、ラーフを側に呼び寄せ、みずからの美麗な指輪を御手から外し、救い手の指に嵌められた。博識なる読者は記憶されるであろうが、病室における歌唱によつて重い熱病を癒やした音楽家の物語として、『パリ科学アカデミー紀要』に記述されるところである。」<sup>①</sup>

この秘話はいくつかの文献に記録され、時期や状況も異なつて伝えられるが、パリ滞在中の行為などの明白な誤りは別として、ラーフによる治療の試みがおそらく数度に及んだからであろう。<sup>②</sup> 学芸擁護のパトロンである公妃は、隠棲せるフアリネリとかねて親密な間柄であり、ラーフへの依存には彼からの助言あるいは影響も考えられる。

なお、二十世紀初めに刊行されたエミリオ・コタデロ・イ・モリの著書『スペイン歌劇の起源と確立』でも、スペインにおけるイタリア人音楽家の役割を委細に記録され、ラーフの経歴のなかでその音楽療法が紹介される。ベルモント公妃の治療はラーフのイタリア帰国以降であるが、イベリア半島でも噂され、現代へも伝わるのであろう。

この時期にマドリッドで活躍した歌手のなかでとくに注目されるのは、十八世紀きつての名テノール、ドイツ人歌手のアントニオ・ラーフであつて、彼は音楽家としての才能だけでなく、高潔かつ謙抑で篤実な人格で尊敬されていた。〔中略〕

ナポリの名門ピグナレティ家のベルモント公妃は、父君の逝去によつて精神の異常をきたし、泣くことすらできぬ病状にあつた。昏迷の状態が続いて、ナポリ近郊の庭園へ日々彼女を連れて行き、心を落ち着かせ、記憶を蘇えらせようと勤めたが、すべて無駄である。そうしたときにアントニオ・ラーフが偶々脇に近寄り、パオロ・ロツリの歌曲〈物寂しい樹陰で〉を歌う。これを聴いて公妃はさめざめと泣き始め、正気を取り戻した。<sup>③</sup>

加えてマンハイム⇨パリ旅行でヴォルフガングに同伴した母マリア・アンナについても、ラーフとの係わりが注目される。一七七七年九月に始まる長途の旅において彼女は、身の世話と旅路の手配をすべて引き受けただけでなく、

① *Journal de Paris*, numero 105, Mercredi 15 Avril 1778, de la Lune le 19. pp.419-420.

② *Lav Cousin d'avalon, Nouveau Dictionnaire D'Anecdotes*, Paris, 1825. pp.303-304.

P.-V.-J. de Bourniseaux, *Histoire de Louis XVI, avec les Anecdotes de son règne*, Paris, 1829. tome IV, p.482. *Arbogast, op. cit.*, S.173.

③ *Emillo Cotarelo y Mori, Origenes y establecimiento de la Opera en España hasta 1800*, Madrid, 1917. p.168.

有力者への訪問や演奏会場への出座にも大抵は同行した。しかし、翌年の三月パリ到着直後の書簡では、当地の強風と寒気を訴え、陽の射さぬ牢獄のような居室での滞在を嘆く。① 陽春になつても、彼女は体調の不良をさらに伝えた。

### 母マリア・アンナの追伸（モーツアルト 一七七八年五月一日付父レオポルド宛書簡）

愛しき背の君へ

あなたもネンテルも元気であるよう祈っています。この三週間私は齒、頭、首、さらには耳の痛みに悩んでいます。いま幸い体調がやや戻っていますが、あまり外出しません。部屋で暖房してもやはり寒く感じます。慣れるのが必要でしょうか。もしやヴェルフエック男爵様などパリへご旅行の節は、私のため黒色粉薬と消化粉薬をお届けくだされば嬉しく存じます。……②

こうしてラーフは彼女の寄寓先で希望の歌曲を毎日のように聴かせていた。注目すべき一文として、夫レオポルド当ての一七七八年六月十二日付書簡を訳出する。瀉血の不首尾によつて彼女は翌月の三日に急死する。この一文は書簡は勤勉な彼女が綴つた最後の便りである。

### マリア・アンナ・モーツアルト 一七七八年六月十二日付書簡

宛先 ザルツブルグ在住レオポルド・モーツアルト宛  
差出 発信 パリ、一七七八年六月十二日

愛しき背の君へ

五月二十八日付のお手紙を六月九日に拝受し、お元気の由嬉しく承りました。幸い私もヴォルフガングも元気でおります。ただし、私は昨日瀉血をして頂いたので、今日はあまり多く書けません。ヴォルフガングは外出して、（バリエルン選帝侯領パリ駐在公使）ジツキンゲン伯爵邸でラーフ様と食事をしています。ふたりは少なくとも週一度はそのお屋敷を訪ね、ヴォルフガングは伯爵様から格別のご好意を頂いています。ご自身も音楽に通曉され、みずから作曲もされます。ラーフ様はここへほとんど毎日来られ、私をご母堂と呼ばれるのです。居心地がよいらしく、大抵は二時頃から三時頃までともに過します。私に聴かせるために訪ねたとして、アリアを三曲歌われた日もあつて、大層嬉しく思いました。ほかの日にもかならず私のためにか歌つて頂けます。ラーフ様の歌唱が私は大好きです。真に尊敬すべき方、本当に真摯なお方です。あなたも親交を結ばれば、敬愛なさるでしょう。私たちがどこに泊っているか、あなたは問われるでしょう。まずモンマルトル街の位置を確かめ、ついでクレリー街を探してください。クレリー街はモンマルトル街から最初に左手に折れる瀟洒な小路で、ここに住むのはおおむね身分の高い方々です。辺鄙ならず、きわめて清潔で、空気の健全な一角に滞在でき、宿主も親切で誠実であるのは打算的なパリで珍しいことです。③

① 海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』、白水社、一九九〇年。第四卷、一七一八、二二・二二頁。

② Mozart, *Briefe und Aufzeichnungen Gesamtausgabe*. Band II, S.347.  
〔参照〕海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』。第四卷。五一頁。

③ Mozart, *Briefe und Aufzeichnungen Gesamtausgabe*. Band II, SS.375-376.  
〔参照〕海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』。第四卷、一〇七・一〇八頁。

ここには音楽の治療的効果に類した表現はみられぬが、高名な歌手に個人的に歌唱を懇請するマリア・アンナにも、慇懃に連日歌い聴かせるラーフにも常ならぬ気迫が感じられる。対応の背景には病苦の暗雲が兆し、両者の脳裡にはナポリ王国デルモンント公妃への治療がおそらく甦ったたであらう。

マンハイム―パリ旅行に関するイギリスの音楽学者サイモン・P・キーフェの論文は、ヴォルフガングにおける音楽活動と健康維持の関連に論究し、いわゆるモーツアルト効果の根源に接近している。この時期における作曲や演奏は、聞き手の痛みや悩みを癒やすとともに、ときには彼自身の体調不良を和らげ、意欲と活力を鼓舞したのである。

『パリ交響曲』の初演を含む十六カ月の旅路において数度にわたり自身の演奏や作曲が、意欲を積極的に鼓舞する役割を果たした、とモーツアルトは記述する。シャボ公爵夫人の邸宅で演奏した日、寒気と頭痛を感じ、貧弱なチエンバロと冷淡な対応に失望した彼は、良質の楽器を用意されるよう求め、他日あらためて来たいと訴える。「しかし、公爵夫人は承知せず、さらに半時間ほど待って、シャボ公爵が帰宅しました。彼はすぐ脇に座り、熱心に耳傾けてくれました。その間自分はチエンバロを演奏し、なんと寒気も頭痛も不快な楽器も忘れて、闊達に弾き続けたのです。」（一七七八年五月一日付父レオポルド宛書簡）ザルツブルグへの帰途、同じくストラスブルにおいて鍵盤楽器の演奏が彼を暖める。「会場は冷え切っていました。しかし、私はすぐに暖かくなりました。なによりも自分を快適にすべく演奏して、約束した曲目に協奏曲をひとつ追加し、最後には即興演奏も充分行ったほごです。」（一七七八年十月二六日付父レオポルド宛書簡）〔中略〕

こうした旅の途上でモーツアルトは音楽の活動や影響によって、ときには人生の難関を乗り越える。カンナビヒ家の令嬢ローザの楚々たる姿を、彼がピアノ・ソナタのひとつ、おそらく作品K三〇九のアンダンテで表現したことはよく知られる。（一七七七年十二月六日付父レオポルド宛書簡）。ローザがみずからこのソナタを演奏したとき、マンハイム宮廷への任官をプファルツ選帝侯に拒否され、失意のまま当地を去らねばならず、モーツアルト自身も周囲の人たち沈痛な心境にあった。「ローザは私のソナタを真剣に弾いてくれました。・・・実に自分は落涙を止めえなかつたのです。終わりには母親も彼女も（友人の）財務長官も同じく涙に濡れました。なぜなら、私のソナタ、一家が挙つて愛する曲をローザが演奏したからです。」（一七七七年十二月十日付父レオポルド宛書簡）①

モーツアルトの作品自体について作成過程の核心を究明し、音楽効果の醸成に迫る研究は、さきにも参照したハーツの論文「ラーフ最後のアリア―ハッセの神髄を受け継ぐモーツアルトの牧歌」である。歌劇『イドメニオ』の主演を演じるラーフと、年老いた名歌手の真価を活かすべく刻苦勉励するモーツアルトを追跡した研究者ハーツは、ベルリン国立図書館に蔵される自筆楽譜のなかに、『イドメニオ』第三幕の掉尾に予定され、ついには削除されるアリアを発見した。ラーフのため書かれたこの楽譜には伴奏を伴うテノール歌手の旋律とともに、上演を目前にした修正や削除の記号、さらには演奏上のメモが記入される。こうした楽譜の複写を掲載するとともに、ハーツはラーフ（最後のアリア）の作成過程や基本的性格を究明した。彼の精緻な分析によれば、モーツアルトが推敲を重ねたアリアには、ハンブルク出身の作曲家ヨハン・アドルフ・ハッセの影響が顕著である。

これなる手稿はまさしくラーフに下読みさせるアリアの試案である。またこれを綴るとき、モーツアルトは中間楽節の全体に係わる重要な改編をも試みつつあった。ラーフが納得するまで全力を傾けると、彼は堅く決意するが、拍

① Somon P. Keefe, Mozart 'stuck in music' in Paris (1778): toward a new biographical paradigm. *Mozart Studies* 2,

子と速度を変えれば、それも困難となろう。普通拍子のアリア第二楽節ではアレグレット八分の三拍子が時代遅れであった。実際にはそれこそ偉大なるJ・A・ハッセの特色であつて、追従者もあつた。中間楽章で多く使用されたアレグレット八分の三拍子から一例を挙げれば、モーツアルトと共通する特徴が明確となる。メタスタージョの脚本により一七六〇年ナポリ公演のためのハッセが作曲した歌劇『アルタセルセ』第三稿より、第三幕のアリア〈願わくは、わが憧憬よ！〉を辿つてみよう。旋律と和声の連鎖、低音部の悠々たる歩調、さらには歌声と低音楽器のカノン風合奏〈わが愛を、神々は知り給う〉は、みなハッセの典型的特徴である。〈心には平安が帰り〉の第二楽節に戻れば、そこには同じような低音部の悠々たる歩調、さらにはカノン風の対話的楽句〈新しい力を与える〉が見出される。モーツアルトはこうしたカノン風の対話的楽句を総譜に拡げ、古風な作風との印象を消して、より闊達で鮮明な曲に仕上げたのである。①

作曲家ハッセとモーツアルト一家は、一七六七年のウイーン旅行から個人的な交誼を有していた。すでに五年前ウイーン宮廷に拝謁したヴォルフガングは、このたび皇帝ヨーゼフ二世から歌劇の作曲を依頼され、全三幕のオペラ・ブッフエ『見てくれの馬鹿娘』を仕上げた。しかし、一部の作曲家と演奏家が上演の妨害を策動するなかで、彼を支援する著名人が各々の邸宅でモーツアルトに演奏する機会を提供した。ザクセン宮廷楽長の職を辞し、一七六三年からウイーンに移住したハッセ、フアリネリと親交ある脚本家メスタージョ、ハプスベルグ政権の重鎮ウエンチエル・カウニッツ、そしてポルトガル王族のカロス・デ・ブラガンサ公などである。②ポルトガル国王の異母弟であるブラガンサ公は、リスボン大地震に際して実兄の高等法院院長ペドロ・デ・ブラガンサとともに救援活動を指揮し、みずから荒墟における遺体の処理に挺身した。その後彼は独裁的な権力者ポンバルの忌避に触れ、フランスやオーストリアでながらも亡命生活を続けていた。

ウイーンにおいて祝典劇『パルテノーベ』を観劇したレオポルド・モーツアルトは、『見てくれの馬鹿娘』への支援を契機に以後ハッセと友誼を結び、二年後第二次イタリア旅行に先立つて、当地の有力者にヴォルフガングの推薦状を頂くよう懇請した。旅行の主要な目的は、一七七一年十月に神聖ローマ帝国皇子フェルディナンド大公とモデーナ大公女マリア・デステの婚儀がミラノで予定され、その慶賀に供すべく祝典劇の作曲が女帝マリア・テレジアよりヴォルフガングに命じられたからである。モーツアルト父子は八月二一日ミラノに到着し、ウイーンからの台本が同月三十日に届いた。女帝は同じくハッセにもメスタージョによる台本で祝典劇を依頼し、彼も同月三十日ミラノに入った。こうして各々数回の練習を経たのち、十月十六日ハッセ作曲の祝典劇『ルツジエーロ』が、翌十七日にはモーツアルト作曲の祝典劇『アルバのアスカーニョ』が初演された。ちなみにこれら祝賀のため当代の著名な歌手も多く招請され、かつてリスボン大地震に遭遇し、ロンドンでモーツアルトに歌唱を教えたカストラート歌手マンツォーリもそこに含まれる。これなる祝賀行事におけるわが子の成功を、父レオポルドが歓喜して伝える一方、ヴォルフガング自身の書簡には、作曲の先達ハッセへの傾倒が誌される。③この証言に注目し、モーツアルトにおけるハッセの影響を重視するを重視する音楽学者ハーツの帰結を転記する。

残念にも祝賀行事の全部は視聴できぬものの、心のなかでそれらを奏することがモーツアルトには可能であった。「今日はハッセの歌劇が上演されますが、父が外出しないので、私も行けません。しかし、幸運にもすべてのアリアを暗記しているので、家にいてこころのなかでそれらを視聴できるのです。〔中略〕半世紀以上もかけ離れた年齢であ

① Hertz, *op.cit.*, p.90.

② 海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』。第四巻。三四八・三五〇、三六三・三六六頁。

③ 海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』。第一巻。二八八、二九一。第二巻、一九二〇、

りながら、モーツアルトはハッセのごときやや古風な大家に好んで調子を合わせた。これなるザクセン人音楽家と同じくモーツアルトは、イタリア音楽の基本命題、すなわちオペラ作曲者に必須な第一の責務は、人間の声を高揚させるにあり、この命題を信奉し、みずからそれを実践した。こうした見地からモーツアルトは、ハッセの精髓をもっとも深い意味において継承したと言える。

ハーツの精緻な論文で音楽療法に類した言辞は用いられぬが、いわゆるモーツアルト効果の根源にヴォルフガングにおけるハッセの影響が潜むことを、暗に立証するとできる。独自の清澄な歌声を発揮できるようヴォルフガングをして再三『イドメニオ』を推敲させたラーフ自身がかねてハッセの作品を愛し、『パリ週報』によればデルモント公妃の精神疾患を〈ザクセン人〉のアリアで癒やした。また、重病であるスペイン国王フィリッペ五世の傍らでファリネリが連夜歌った四曲か五曲のうち、つねにふたつはハッセの作品であつて、いずれも歌劇『アルタセルセ』に含まれるアリア「この甘い抱擁により」と「青ざめた太陽」であつた。十八世紀ヨーロッパ音楽の進展を追つて、一七七二年ブルツェル、ミュンヘン、プラハへと旅した旅した音楽史家ブルネイは、ウイーンにおいて三人の高名な芸術家グルック、メスターシオ、ハッセと対談した。

ウイーンにおいても詩人や音楽家は取り巻きをも含め、流派で競い合う。主要な流派の一方はメスターシオとハッセをいわば頂点とし、他方はカルサリビとグルックを旗頭とする。前者は一切の革新をまやかすと軽蔑し、音楽劇の伝統的な様式を誇示し、聴衆にも詩人や音楽家と同等の見識を要求する。語り歌つては吟遊詩人に等しく、曲を作つてはアリア、二重奏、合唱を重んじる。〔中略〕

ハッセの功績は大陸で遍く知られ、いかなる識者も認めるとおり、きわめて多作な彼こそ歌曲において当代もっとも自然で、高雅かつ聡明な作曲家である。詩文をも声音をも熟知する彼は、言語表現に天才的な判断を駆使し、歌い手に即して甘美で穏和な旋律を付与した。劇場における注目的、出演者の声音をハッセはつねに尊重し、楽器類の錯綜という玄人染みた噪音で窒息させはしなかつた。しかも、作品の中心像に画匠が最強の光を投じる如く、肝心の要素を明瞭とすべく、とくに配慮したのである。①

以上モーツアルトに係わる音楽療法の根源であるが、世界的な〈モーツアルト効果〉の声価に照らすとき、専門分野における近年の研究をもつてしても、遺憾ながら多角的な証左の一端と自覚せざるをえない。モーツアルトの作品に備わる広汎な医療的効能は、『イドメニオ』完成の以後、すなわちもつとも豊難にして多難でもあるウイーン時代を見据え、三大交響曲をはじめとする管弦楽の名作群、さらには『後宮からの誘拐』より『魔笛』にいたる不朽の歌劇群との連関で、その根源をさらに究明されるべきであろう。

さて、二〇一一年東日本大震災を契機に、リスボン大地震の委細を辿り始めた筆者は、ポルトガル王妃マリアナ・ヴィットリアなど被災者・関係者について、震災後の去就を追う迷走のなかで、ふたりの名歌手、ファリネリおよびラーフによる音楽治療と出会い、さらには歌劇『イドメニオ』の作曲過程やいわゆる〈モーツアルト効果〉を知つた。こうした本稿の結びとして、東日本大震災における音楽療法の実践を以下に紹介しよう。日本音楽療学会東海支部の『研究紀要』第三巻（二〇一二年）には、佐治順子教授を筆頭執筆者として、報告「東日本大震災の被災地での音楽療法を考える―宮城県と岩手県沿岸部での実践活動を通じて―」が掲載される。マグニチュード九・〇、津波八・五メートル以上、死者・行方不明二万名を記録した大地震の一カ月後、まず宮城県のA病院で以前か

① Charles Burney, *The Present State of Music in Germany, the Netherlands, and United Provinces*. London, 1773. volume II, pp.232-235.

らの集団的な音楽療法が再開された。①

筆者らは、東日本大震災前から、宮城県亘理郡のA病院で、そして大震災後、岩手県宮古市のB避難所、宮城県石巻市のC避難所で音楽療法を実施した。この大震災で、参加者の多くが、音楽療法スタッフ自身の家や家族も被災した。しかしA病院では、震災一ヶ月後から音楽療法を再開し、現在も実施している。B避難所では、震災一ヶ月後から、B小学校校舎の避難所で音楽療法を開始した。その後B小学校校庭に建てられた仮設住宅内の談話室で、引き続き音楽療法を実施している。C避難所では、震災二ヶ月後半から、C公園管理棟避難所で音楽療法を実施している。その後参加者の一部は近くの仮設住宅に移動したが、音楽療法は引き続きC避難所で、仮設住宅と避難所の両入居者のために実施している。②

A病院での対象はもともと神経難病患者で、常時十二名ほどで、数名が車椅子利用、年齢は五十歳から八五歳であった。震災後は継続五名、新規七名に変動が生じた。音楽療法士三名、看護師二名、ボランティア一名で推進されたが、スタッフのなかには自宅の破壊により避難所で生活する人もある。B避難所では二〇一一年五月から月二回各三〇分実施され、高齢者や障害者のため運動や手遊びも併用された。C避難所での参加者の多くは、疲労と困惑、喪失感、運動不足の印象を当初抱かせた。生活不安による無表情も見られたが、四回目頃には再興意欲の芽生えも感じられた。③ C避難所における実践スタッフの初回記録をここに転記する。

開始時間四〇分前からゆっくり準備を始めると、持参した楽器に触れ、歌の本をめくる人が出てきた。参加者の表情や会話のスピード等から、ゆっくりとしたテンポでパツヒエベルの「カノン」の演奏を流し、トーンチャイムで通奏低音を重ねた。注目してくれる人の目をみながら、様々な想いを一音一音に込めて届けるような心がけた。曲の後半には涙ぐんで聞いている人もいた。繰り返されるテーマを感嘆にアレンジして、今後、セッションの開始時間として位置づけていきたいと思った。

次に「おぼろ月夜」「夏は来ぬ」が会場にひろがると、C避難所に別のさわやかな空気が流れたように感じた。その後「斎太郎節」「水戸黄門」は打楽器を加えてゆっくり歌い、リクエストの小中学校歌お、「ふるさと」を調整して終了した。④

① 佐治順子ほか五名「東日本大震災の被災地での音楽療法を考える―宮城県と岩手県沿岸部での実践活動を通じて―」『日本音楽療法学会東海支部研究紀要』第三卷（二〇一二年）。一三三頁。

この論文を筆者が知り得たことを、日本音楽療法学会と同学会東海支部長伊藤孝子教授のご厚意に感謝する。

② 同書、一三二―一四頁。

③ 同書、一五一―一八頁。

④ 同書、一九頁。